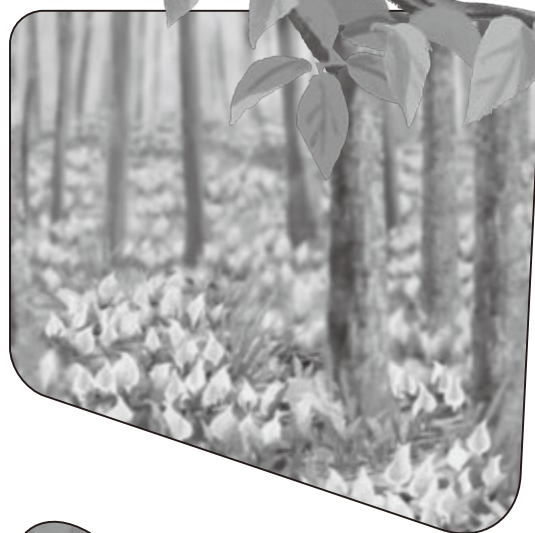




クマの森の春夏秋冬

The four seasons of Urabandai through a Bear's Eyes



ニホンザルの親子

シロヤナギ

02



03

ゴジュウカラ



アカゲラ

04



春 Spring

キビタキ

05

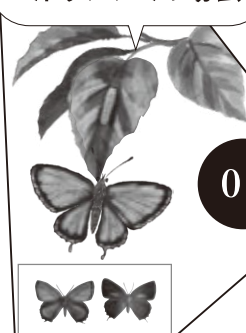
オオルリ

ノジコ



ミドリシジミの幼虫

06



ミドリシジミ

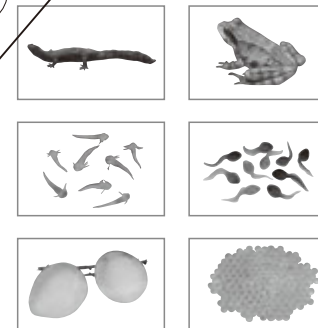
ヤマアカガエル

08

クロサンショウウオ



ミズバショウ



4～5月、森は雪から新緑へと衣替えをする頃、ツキノワグマは活動を始めます。芽吹いたハンノキ林ではニホンザルの赤ちゃんがすくすく育ち、キビタキ、オオルリ、ノジコの澄んだ歌声は春を告げます。森の中ではゴジュウカラが木の幹を逆さに動き、アカゲラが木をつつく音が響きます。雪解け後の湿地にはミズバショウが咲き、沼地にはヤマアカガエルやクロサンショウウオの卵が見られます。



裏磐梯ビジターセンター

<https://urabandai-vc.jp/>



ポケットガイド[館内解説]

<https://exhibition.urabandai-vc.jp/>

クマの森の春夏秋冬

The four seasons
of Urabandai
through
a Bear's Eyes

裏磐梯の森は、いつもにぎやかです。
春夏秋冬、様々な生きものが息づき
それぞれが一生懸命に生きています。
暮らしぶりは、とてもユニークで
賢い知恵や面白い工夫に満ちています。

この冊子では、その秘密を詳しく紹介します。
変わった形や色をした虫や植物
森の中に響く鳥たちの美しい声
動物たちの痕跡や、面白い行動。
それらにはすべて、理由があります。
この冊子を読んでから森に入れば
裏磐梯に暮らす生きものを
今よりもっと近くに感じられるはずです。



01

ハンノキ林ですくすく育つ
ニホンザルの赤ちゃんたち。

5月に入ると徐々に新緑が見えてきます。水辺に育つハンノキ林では若葉を求めてニホンザルたちが集います。4月から7月はニホンザルの出産シーズン。小さな赤ちゃんを連れた母ザルの姿が見られます。一般的にニホンザルは一度に一頭の赤ちゃんを産み、生まれてすぐは母親が抱いて育てます。1ヶ月ほどすると歩き出し、次第に群れの子どもと遊ぶようになります。

02

花は黄緑色だけど“シロ”ヤナギ。
名前の由来は、葉っぱにあります。

湖や沼が多い裏磐梯には、湿った土壌を好むシロヤナギが多く育ちます。早春、ほかの木々より少し早く芽吹くことから、春を告げる木として知られます。4月中旬から5月に黄緑色の花が咲くと、冬の間、色が乏しかった森に彩りが戻ってきます。花が黄色いのに「シロヤナギ」という名がついているのは、葉の裏が白っぽい色をしているから。葉をめくって確かめてみよう。

03

まるで忍者!?
逆さまでも歩けるゴジュウカラ。

木の幹を上に行ったり、下に行ったり、ちょこまかと忙しく動く小さな鳥。よく見ると頭を下に向けて、逆さまの体勢で歩いている!? こんな離れ技ができるのは日本の鳥界の中ではゴジュウカラだけ。スズメくらいの小さな鳥ですが、長くて頑丈な足指と爪を持っていて、忍者のように自由自在に幹の周りを動き回りながら、樹皮の中に隠れている昆虫やクモを見つけて食べます。

04

一定のリズムを森に響かせる
ドラム演奏の名人、アカゲラ。

森を歩いていると、「コココココ……」という一定のリズムが聞こえてきます。これはキツツキの仲間であるアカゲラやアオゲラ、コゲラなどが木の幹をくちばしで叩いて出す音。「ドラミング」といって、樹皮の中にいる虫などを探したり、求愛や縄張り宣言のために音を出すこともあります。中でもアカゲラは1秒間に15～20回も木を連打する、森の名ドラマーです。

05

キビタキ・ノジコ・オオルリは
春を告げるコーラス隊長。

春から初夏には多くの渡り鳥がやってきます。4月下旬からほかの鳥たちに先駆けて渡ってくるのがキビタキやノジコ、オオルリ。澄んだ歌声は春を告げるものとして親しまれています。美しい声は「さえずり」といって、主に春夏の繁殖期にオスがメスに求愛したり、縄張りを宣言したりするもので、歌うのはオスだけ。季節を問わずに鳴く声やメスの声は「地鳴き」といいます。

06

「森の宝石」、ミドリシジミ。
幼虫の賢い生存戦略とは？



ミドリシジミはオスだけが金属のように輝くエメラルドグリーンの羽を持つ美しいチョウで、「森の宝石」と呼ばれます。冬に産み付けられた卵は4～5月頃に孵化し、幼虫はハンノキなどカバノキ科の新芽の中に入り込んで若葉を食べて育ちます。大きくなると葉を上手に袋状に綴ってその中に隠れます。外敵から身を守る賢い戦略です。

07

湿原を彩るミズバショウ。
ツキノワグマにご注意を。

雪深い裏磐梯で、春の訪れを感じさせてくれるのが4月下旬ごろから湿原や林の湿地などに花を咲かせるミズバショウ。白い花びらに見えるのは葉が変形したもので、その中央にある黄色い部分が花です。ミズバショウはツキノワグマの大好物。ちょうど冬眠から目覚める時期に開花を迎えるため、おなかを空かせたクマたちがやってくることもありますので、注意しましょう。

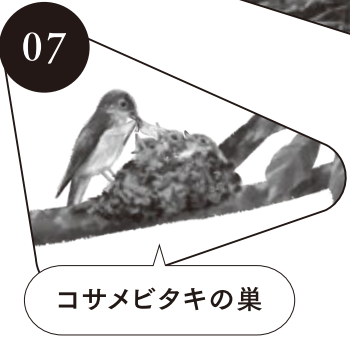
08

早春の沼地で探そう!
謎のつぶつぶ入りゼリー。

4月、まだ枯れ草に覆われた沼地をのぞくと、つぶつぶが入ったゼリーのようなものが浮かんでいます。これはヤマアカガエルの卵。まだ寒い時期にほかのカエルより先に産卵するのは、昆虫やヘビなどの天敵を避けて、なるべく早くオタマジャクシを大きくするためだと考えられています。同じ時期、沼に白くブヨブヨした塊があれば、それはクロサンショウウオの卵です。



夏 Summer



イワガラミやツルアジサイなど、よく似た白い花々が咲き、ウワミズザクラが一足早く実を付けます。樹上には綿菓子のようなモリアオガエルの卵塊。
鳥たちは木の幹や枝葉、コケなどに巣作りをします。葉っぱを丸めた虫もいます。
タゴガエル、ツチガエル、カジカガエルの声が梅雨の空に響くころ、オオジシギやアサギマダラが南から渡ってきます。
ツキノワグマの子どもも元気です。

 裏磐梯ビジターセンター
<https://urabandai-vc.jp/>

 ポケットガイド[館内解説]
<https://exhibition.urabandai-vc.jp/>



01

夏の訪れを知らせる エゾハルゼミの大合唱。



5月下旬ごろから6月初旬にかけて、森は一気に賑やかになります。春から初夏への移り変わりを告げるのが、エゾハルゼミの大きな鳴き声。普段聴き慣れているアブラゼミとは違う、「ミーキョン、ミーキョン、ケケケケ」という独特な声はカエルの声にも似ていて、ユニークです。「鳴く」といっても、実際はお腹を震わせ、お腹の中の空間を共鳴させる方法で、オスだけが音を出します。

02

サクラだけちょっと違う？ ウワミズザクラのブラシ花。

5月から6月にかけて花を咲かせるウワミズザクラは、湿地や川沿いに多く育つ樹木。サクラという名がついていますが、その花は真っ白。小さな花がたくさん集まったブラシのような形をしていて、見慣れたサクラとは違います。いっぽう葉は、一般的なサクラに似ていて、卵形か卵状の楕円形。先にいくほど細くなり、葉の縁にはトゲのようなギザギザがついています。

03

夏に熟すウワミズザクラの実 は鳥やツキノワグマの大好物。

秋に実をつけるものが多い中、ウワミズザクラは夏に実をつける数少ない植物。赤く色づいた実は黒く変化し、完熟します。ほかの植物より早く熟するため、多くの鳥やツキノワグマたちが食べにきます。生きもののおなかに入った実は種が消化されずに残り、離れた場所でフンと一緒に排出されます。こうして生きものによって種が運ばれることを「種子散布」といいます。

04

アジサイのそっくりさん!? イワガラミとツルアジサイ。

夏の森ではアジサイに似た白い花に出会います。裏磐梯には「アジサイのそっくりさん」がたくさん生育していて、少しずつ特徴が違います。共通しているのはアジサイと同じく、白い花びらに見える部分が「装飾花」とってじつはガクであること。イワガラミは装飾花が1枚ずつつくのに対し、ツルアジサイは4枚あるなど、間違い探しをしながら歩くのも楽しいものです。

05

森に現れた綿菓子 の正体は？ モリアオガエルの奇妙な卵。

梅雨の頃、水辺の木の枝にぶら下がる綿菓子のような物体を見つけたら、それはモリアオガエルの卵塊。中には300～500個の卵が入っています。メスは高い木に登り、オスと一緒に分泌した粘液を後ろ脚で泡立て、卵塊を作ります。卵からかえったオタマジャクシはポチャンと池に落ち、そこで成長します。ユニークな産卵方法は外敵から卵を守るためだと考えられています。

06

鳥たちのお宅拝見！ ユニークな巣作り【枝編】

鳥たちは自然の中にある色々な材料で巣を作り、産卵・子育てします。タカの仲間のハチクマは8～15mほどの高い木の上に木の枝を組み合わせて、大きな丸いお皿のような巣を作ります。子育て中にも枝を追加することがあり、巣はどんどん大きく、立派になります。ほかのタカ類が使った古い巣を再利用することもあります。せっせと新築する場合も多いようです。

07

鳥たちのお宅拝見！ ユニークな巣作り【コケ編】

渡り鳥のコサメビタキは初夏から夏にかけて繁殖します。広葉樹の横枝などにお椀のような形の巣を作りますが、巣の外装にはコケや地衣類を上手に貼り付けて、遠くから見ると木のコブのように見えます。外敵から卵やヒナを守るためのカムフラージュかもしれません。小さなお椀の中に入って卵を温めている様子はまるでお風呂に入っているようで、とても愛らしいです。

08

鳥たちのお宅拝見！ ユニークな巣作り【木の穴編】

キツツキの仲間のアオゲラは、得意の「つつき」で木の幹に穴をあけて巣を作ります。同じくゴジュウカラも木の幹の穴で子育てしますが、キツツキが使い終わった古い巣を再利用するちゃっかり者。しかし小さなゴジュウカラにとってキツツキの巣穴は大きく、外敵が侵入する危険も。そこで穴の入り口に泥などを塗って自分に合ったサイズに改装してしまう、リフォーム上手な鳥です。

09

鳥たちのお宅拝見！ ユニークな巣作り【草編】

湿地周辺のアシ原など開けた場所で子育てするオオヨシキリはアシの茎に枯れ草などを上手に絡めて巣を作ります。ときにカッコウの親がその中に卵をひとつだけ産むことがあり、オオヨシキリはそれに気づかずに卵を温めます。先に生まれたカッコウのヒナはオオヨシキリの卵を巣から落とし、自分だけオオヨシキリの親に育ててもらいます。「托卵」という珍しい習性です。

10

個性的な声ばかり！ カエルの「のど自慢大会」。

裏磐梯に棲むカエルは姿も声も好む場所も様々。梅雨時期にはその声が響きます。タゴガエルは沼や湿地の岩の隙間、カジカガエルは山地の溪流沿いに暮らすので目にすることは少ないですが、湿地に棲むツチガエルは見られるチャンスがあるかもしれません。モリアオガエルは森で生活しますが、5～6月頃には産卵のためにビジターセンター近くの沼にもやってきます。

11

メスにはとことん優しく！ 恋愛上手なアカショウビン。

大きく鮮やかなくちばしを持つアカショウビンは、湿地のある森に暮らすカワセミの仲間。水の上を低空飛行し、浅瀬にいる虫などを上手にすくいにとって食べます。繁殖時期にはオスがメスに獲物をプレゼントし「つがいになろうよ」と誘います。これは「求愛給餌」という習性です。つがいになるとオスが木の幹に巣穴を掘って産卵の準備。どこまでもメスにやさしい鳥です。

12

オーストラリアから、ひとっ飛び！ オオジシギの脅威のパワー。

オオジシギはオーストラリア東部からタスマニア島で越冬し、春から初夏にかけて日本で繁殖する渡り鳥。南半球から日本まで70000km以上をノンストップで飛び続けるという、すごいパワーの持ち主です。長く細いくちばしを地面に刺し、土の中の生きものを探って食べます。残念ながら近年は裏磐梯を訪れる個体数が減少し、その姿を見ることも少なくなってきました。

13

宝石のように美しい眼をもつ アマゴイルリトンボ。

水辺が多い裏磐梯はトンボたちの楽園です。中でもコバルトブルーの美しい複眼をもつアマゴイルリトンボは日本の固有種で、福島県のほか青森、山形、新潟、長野県にしか生息しない貴重な種類です。棲んでいるのは周囲に樹木がある池や沼の周辺。複眼や体の色がブルーになるのは、成熟したオスだけ。メスの体は黄緑色で、複眼はうっすらと青みを帯びています。

14

葉っぱの中の住人

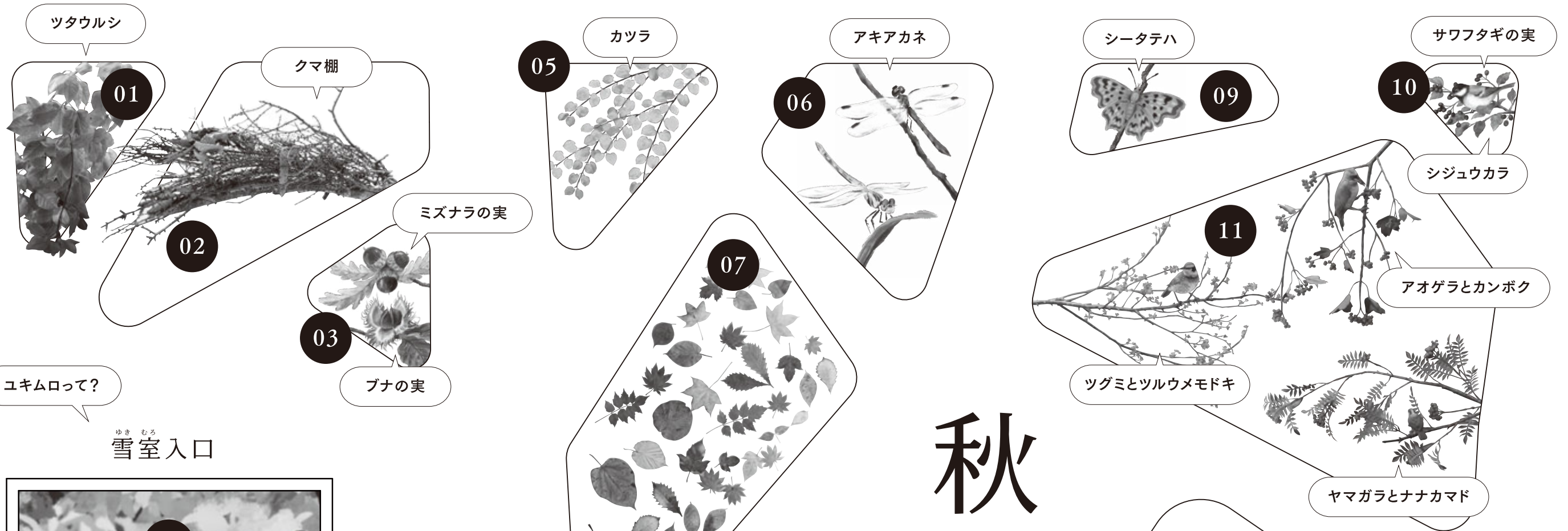
初夏の森で、くるくると巻かれた葉っぱが木にぶら下がっていることがあります。これはオトシブミという昆虫の仕業で、中には幼虫が入っています。メスは口で上手に葉に折り目を付けて丸め、中に1つつ卵を産みます。幼虫は外敵に襲われることなく葉を食べ、成長します。ほかにも様々な形で葉っぱを幼虫の“ゆりかご”にする昆虫がいます。葉をめくって覗いてみましょう。

15

渡り鳥のように旅をするチョウ。 アサギマダラの飛行ルートを追え！

アサギマダラは春に南から北へ、秋には北から南へと長距離を移動する日本で唯一の“渡りチョウ”です。その飛行ルートや渡りをする理由はまだはっきりわかっておらず、今も研究が進められています。裏磐梯では7月下旬から9月上旬にかけて飛来し、デコ平などでその姿を見ることができます。薄桃色のふさふさした花をつけるヨツバヒヨドリの花の蜜が好物です。





秋 Autumn

森が鮮やかな
紅葉に彩られる秋。
ナナカマドやカンボク、
ツルウメモドキは
赤い実を付けます。
木の実が豊富な森では、
鳥や動物たちが
冬に向けた準備に大忙しです。
ニホンリスは木の実を地面に埋め、
カケスは木のすきまに隠して冬に備えます。
ツキノワグマが木の上で食事をする、
枝が折り重なったクマ棚ができます。

 裏磐梯ビジターセンター
<https://urabandai-vc.jp/>

 ポケットガイド[館内解説]
<https://exhibition.urabandai-vc.jp/>



01 木を這い上がる真っ赤な葉っぱ。 ツタウルシの美しい紅葉。

秋の森を歩いていると、木の幹にぐるぐる巻きついている赤い葉を見かけます。これはツタウルシという植物で、木の幹の下から上へ、這い上がるようにして成長します。真っ赤に色づく紅葉は鮮やかで、森の中でひときわ目立ちます。落葉広葉樹の森に多いですが、五色沼周辺のアカマツ林で見られることも。葉や枝、幹に触れると肌がかぶれてしまうので、注意しましょう。

02 木の上にある巨大な鳥の巣!? じつはツキノワグマが作ったもの。

木の上のほう、たくさんの枝が折り重なって大きな鳥の巣のように見える物体を見つけたら、それは“クマ棚”かもしれません。秋、ツキノワグマは上手に木に登って、木の実やどんぐりを食べます。枝ごと折って実や種だけ食べるので、自分のまわりにどんどん枝が溜まって、鳥の巣のようになってしまうのです。クマ棚がある森は、それだけ実り豊かということです。

03 “どんぐり”にもいろいろある。 ブナとミズナラの違いは？

“どんぐり”はツキノワグマの好物。“どんぐり”とは、かたい皮がある種子(堅果)と、種子を覆う殻斗という部分をもつ木の実のことで、ブナやミズナラ、クヌギなど、ブナ科の実につけられた愛称です。それぞれ大きさや形が違い、ミズナラは2.5cmほどの卵形で殻斗は帽子のような形、ブナは1.5cmほどと小さく、イガイガのある殻斗の中に2つの種子が入っています。

04 夏まで残る!? 雪の天然クーラー“雪室”

「雪室」とは、冬の間に降り積もった雪を藁などで囲って貯蔵しておき、夏に利用する雪国ならではの知恵です。冷房がない時代には“天然の冷蔵庫”として使われていました。裏磐梯ビジターセンターではこの知恵から学び、雪を利用したクリーンな冷房システムを導入しています。

05 森に漂う焼き菓子のような香り。 その正体は、カツラの葉です。

木々が色づく紅葉の時期、森の中でふと甘い、焼き菓子のような香りを感じることがあります。その香りの正体は、カツラという木の葉。カツラの葉にはマルトールという成分が含まれていて、それが甘い香りを出しているのだそう。多くの場合、カツラの葉は黄色く色づきますが、緑やオレンジ、赤のグラデーションが入ることも。葉の形は丸みを帯びたハート型です。

06 赤トンボだけど、夏は黄色。 秋に真っ赤に色づくアキアカネ。

秋によく見かける赤トンボ。じつはたくさんの種類があって、中でもアキアカネはその代表格です。暑さが苦手なアキアカネは夏の間は涼しい山の上で過ごし、秋になると産卵のために平地にある水辺におりてきます。秋には体が赤くなりますが、じつは夏の間は黄色っぽい体色をしていて、山にいたときは“赤トンボ”らしくありません。まるで紅葉のようで、面白いですね。

07 紅葉ってなぜ起きるの？ 色素が作る様々な葉の色。

秋の森は色とりどりの紅葉を見せてくれます。植物の葉には光合成を行うのに必要な色素であるクロロフィル(緑色)やカロテノイド(黄色など)が含まれていて、秋に気温が下がるとクロロフィルが分解され、カロテノイドの黄色が目立つようになります。樹木によってはその分解過程で赤色やオレンジ色の色素が作られ、その結果、様々な色の葉が生まれるのです。

08 森に木に残された傷は 動物たちがそこにいた証。

森の中にある木々を見ていると、枝や幹に何者かに齧られたり、穴を開けられたりした痕があることに気づきます。それらは動物たちが食べたり、その中にいる虫など探して掘ったりした痕跡。自分が歩く前に、たしかにそこに動物がいたという証です。動物によって木々に残す痕は様々。実際に森から集めてきた食痕を見て、どんな動物がつけた痕なのか想像してみてください。

09 成虫で越冬する珍しいチョウ。 秋に可憐に舞うシータテハ。

チョウは春から夏にかけてよく見る昆虫というイメージですが、シータテハには春夏に活動する「夏型」と、秋に現れて成虫のまま越冬する「秋型」の、2種類がいます。チョウの姿が見えなくなった秋にオレンジと黒のまだら模様の羽をもつチョウが舞っているのを見たら、秋型のシータテハです。羽を閉じると枯れた木の葉にそっくりで、上手に擬態して天敵をかわしています。

10 赤い実と、どっちがおいしい？ 青い果実をつけるサワフタギ。

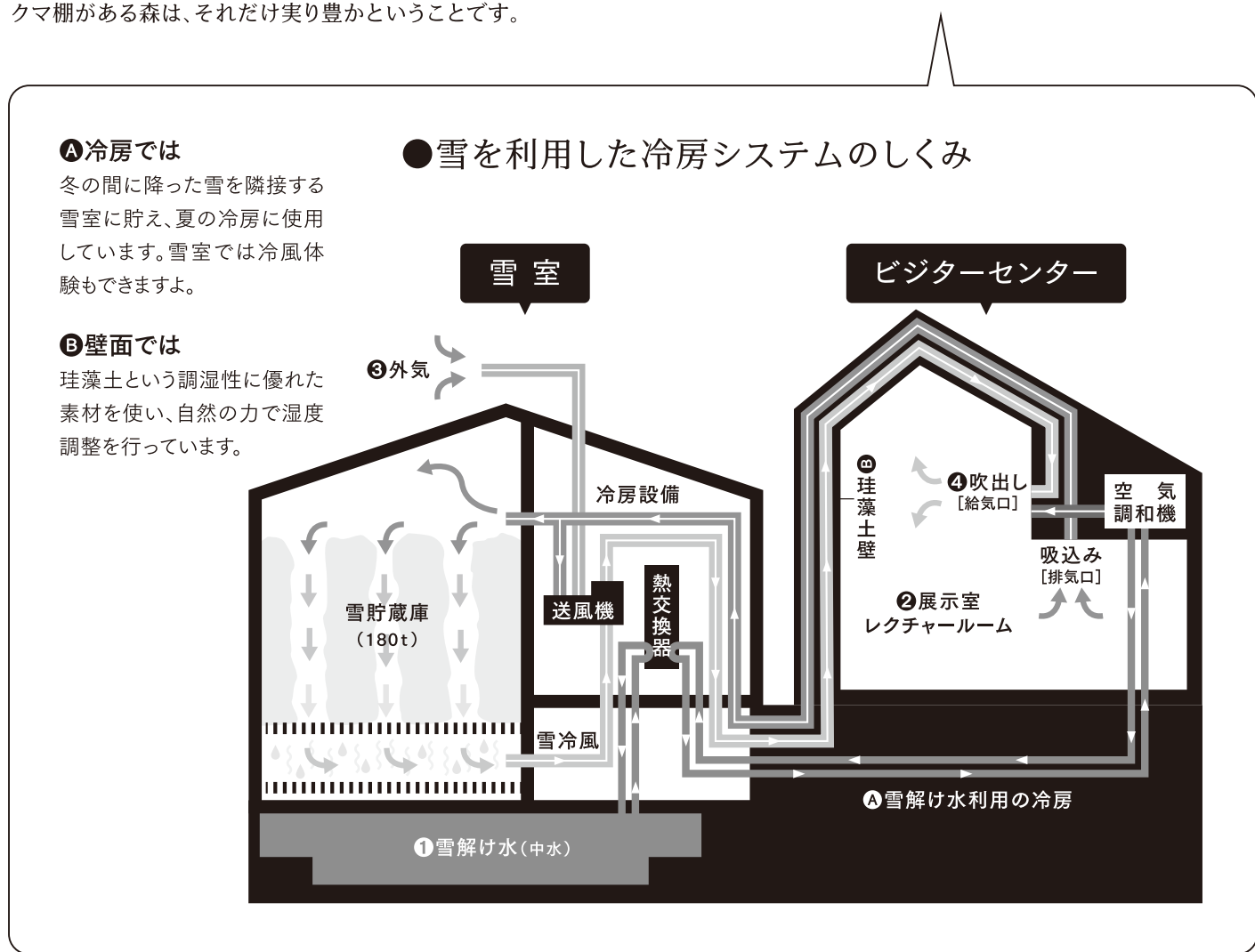
秋の森では様々な木に果実が実りますが、その多くは赤やオレンジ。そんな中でサワフタギの鮮やかな青い実はひときわ目立ちます。赤い実のほうがおもしろいかなと思いかもしれませんが、シジュウカラやゴジュウカラなどはよく食べていて、鳥たちにはそこまで不評ではないようです。ブルーベリーのような甘酢っぽい味で、ジャムにして食べる人もいます。

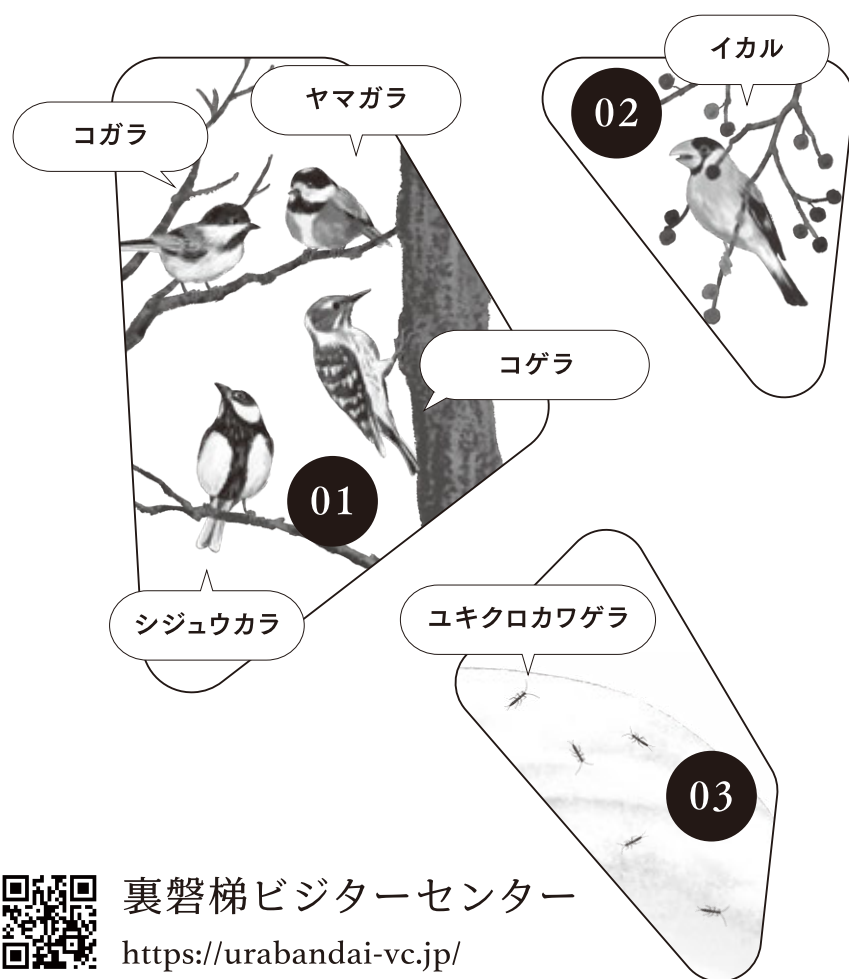
11 赤い実でも人気はそれぞれ。 鳥たちの好みは、いかに!?

たくさんの鳥たちで賑わっているのは、やっぱり赤い果実が実る木々。真っ赤に色づくナナカマドは人気で、やや透き通った小さな実をつけるツルウメモドキにも鳥たちが集まっています。同じく綺麗な赤色をしたカンボクの実ですが、こちらは苦くて、鳥も食べない「鳥喰わず」の実と呼ばれるほど。それでもアオゲラやツグミなど、一部の鳥は食べているようです。

12 実りの秋にしっかり冬支度。 生きものたちの食料貯蔵作戦!

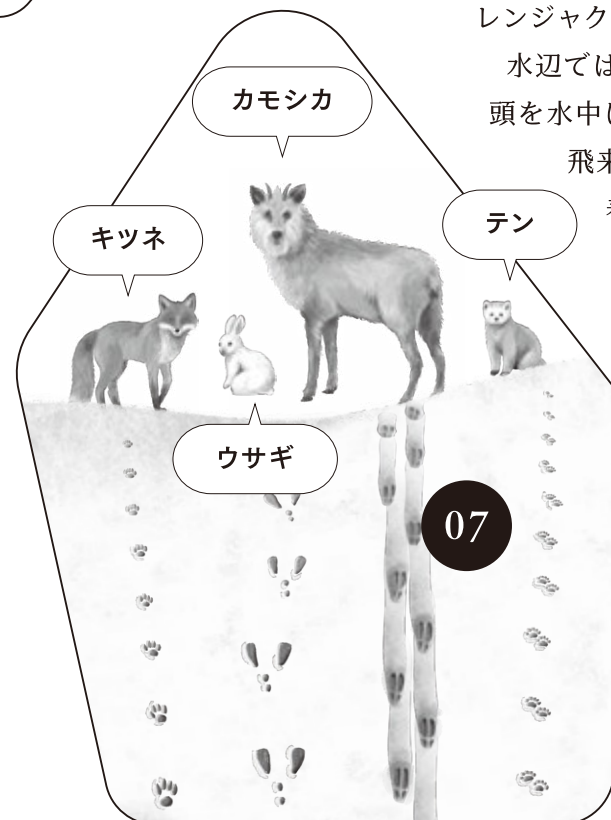
秋の森では、長く厳しい冬を越すために、せっせと食料をため込む生きものたちの姿が見られます。ニホンリスは集めたどんぐりをほっぺの中にある“ほほ袋”に詰め込んで、木の根元や土の中に埋めます。カケスも木の実を上手に樹洞に隠して、冬に備えます。食べ忘れたどんぐりの中には春に芽を出すものも。リスやカケスは図らずも木を植える手伝いをしているようです。





裏磐梯ビジターセンター
<https://urabandai-vc.jp/>

ポケットガイド[館内解説]
<https://exhibition.urabandai-vc.jp/>



冬 Winter

寒さ厳しい冬。ツキノワグマは冬眠中ですが、森の中では生きものたちの痕跡がたくさん見られ、雪の上を歩く昆虫もいます。鳥たちも元気いっぱいです。ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラなどが集まり、真っ赤なベレー帽を被った冬のアイドル ベニヒワも渡ってきます。レンジャクの仲間はヤドリギが大好きです。水辺では潜水上手なキンクロハジロや頭を水中に突っ込むヒドリガモが生活し、飛来していたコハクチョウは春の訪れとともに北へ戻っていきます。



01 1本の木に色々な鳥が集合！ 冬に見られる「カラの混群」。

冬、広葉樹が葉を落とすと、鳥の姿がよく見えるようになります。森を見ると、1本の木にコガラやヤマガラなど異なる種類の鳥たちが集まっていることがあります。これは主にシジュウカラ科の鳥が群れる「カラの混群」といって、食べ物が少ない晩秋から冬に見られる行動です。種の違いを超えて大きな群れを作ることによって天敵から身を守っているとも考えられています。

02 ペンチ並みのすごいパワー！？ イカルのスゴいくちばし。

冬の森でひときわ目立つ、黄色く巨大なくちばしを持つ鳥はイカルです。これほど大きくなくちばしをもつ鳥は珍しく、そのパワーはほかの鳥が食べられない堅い木の実も簡単に割ってしまうほど。とくにエノキの実はクルミのような堅い殻を持ちますが、イカルはそれもバリバリと割り、中の種子を上手に食べます。イカルを見つけたら、ぜひ食事の様子を観察してみてください。

03 雪の上のごま塩は……？ 夏眠するユキクロカワゲラ。

雪が積もった水辺の森を歩くと、足元にごま塩のような物体を見ることがあります。それはユキクロカワゲラという昆虫で、春に孵化した幼虫は水温の低い川底で「夏眠」します。秋に眠りから覚めると真冬に成虫になり、活発に行動するという、多くの昆虫とは逆の生活史をもつ珍しい虫です。羽をもたない成虫は産卵場所となる川の上流を目指し、地道に歩いて移動します。

04 冬眠中に出産、子育てする ツキノワグマのお母さん。

裏磐梯のツキノワグマは11月から4月にかけて冬眠します。自然の中にある岩穴や土穴、樹洞などを利用し、妊娠しているメスはその間に出産します。ほとんどの場合2頭の子を産みますが、その大きさは200～400gと人間の両手に収まるほど。冬眠中にお乳を飲んで育ち、春に冬眠穴から出てきます。生まれたての子熊の大きさや重さを、手に取って体感してみましょう。

05 ヤドリギとレンジャクの おいしく、賢い関係。

木々の上のほうにくっついている大きな緑の玉。これは樹木に寄生するヤドリギという植物です。秋に実る果実はねっとりした粘着質で、キレンジャクやヒレンジャクなどレンジャク科の鳥たちの大好物。実を食べたあとのフンにも粘着質が残りますが、それこそがヤドリギの生存戦略。ねっとりしたフンが様々な樹木に付着することで、ヤドリギは生息域を拡大していきます。

06 冬の森にバナナが出現！？ ユニークなカメムシの仲間。

「バナナ虫」の愛称で親しまれているのがツマグロオオヨコバイという虫。カメムシの仲間で、成虫で越冬する数少ない昆虫です。細長く、やや緑がかった黄色の体は、まるでバナナ！ 頭部と腹部にある黒い斑点は、ちょっと熟れすぎたバナナのように面白いです。冬は葉の裏や樹木の割れ目でじっとしていることが多いですが、日差しがある日には活動する姿も見られます。

07 雪の時期だけ楽しめる 動物たちの足跡探し。

雪の森では動物たちの足跡を見つけやすくなります。キツネはイヌに似て肉球と4本指が残り、一直線になります。テンは5本指で、爪の跡ははっきりと見えるのが特徴。カモシカの足跡は丸みを帯びて細長く、まるでタラコを2本並べたような感じです。ウサギは最も判別しやすく、丸い小さな跡（前足）が2つ前後に並び、細長い跡（後ろ足）がほぼ平行に2つ並びます。

08 よく見ると面白い！ 植物の冬芽ウォッチング。

枯れたように見える木々も、よく見ると冬芽をつけて春に備えています。冬芽は樹種によって形や色が違って面白いものです。2つの葉芽をもつオオカメノキはうさぎの耳のよう。ホオノキは日本の樹木で最大の冬芽をもちます。毛に覆われたオニグルミの冬芽は、つい触ってみたくなる質感。「葉痕」と呼ばれる葉っぱが落ちた跡が動物の顔に見えるのが特徴的です。

09 冬の野山に残された 植物たちの種まき戦略。

冬の野山では立ち枯れた植物を見かけます。中でも特徴的なのがオオウバユリで、くす玉が割れたような実が枯れて残っています。秋に実を開き、中にある種を風に運んでもらうのです。カエデの木には2つ羽のあるプロペラのようなものがぶら下がっています。これは翼果といって、秋にくるくる回りながら落下し、羽の中心部にある種が遠くへと運ばれていきます。

10 裏磐梯に冬を告げる使者。 北から渡るコハクチョウ。

磐梯山周辺、とくに猪苗代湖は日本屈指のコハクチョウの越冬地。裏磐梯の湖沼でも12月頃から姿を見られます。ユーラシア大陸北部で繁殖したコハクチョウは冬に日本各地に飛来し、3月頃北へ戻ります。なぜわざわざ冬に来るの？ と思いがちですが、彼らの繁殖地はより寒く、冬には湖や川が凍ります。コハクチョウにとって日本の冬は暖かく、過ごしやすいのです。

11 真っ赤なベレー帽がかわいい 冬のアイドル、ベニヒワ。

モフモフの体と雪の森の中に映える真っ赤なベレー帽、胸元のにじむピンクの模様が愛らしいベニヒワは冬の森のアイドル。裏磐梯には冬に渡ってくる冬鳥で、その姿を見ようとたくさんの野鳥愛好家が集います。オスメスともに頭の部分が赤いですが、胸元の羽毛がピンク色なのはオスだけ。群れで行動し、川沿いのハンノキ林などで観察できることが多いようです。

12 雪の森を歩いて探そう！ 天然のドライフラワー。

アジサイによく似た花を咲かせるツルアジサイは、枯れたあともその形をきれいに残すことが多い植物です。雪の野山を歩いているとドライフラワーのように茶色くなった花が落ちていて、その造形の美しさに目を見張ります。夏に咲く白い花もきれいですが、真っ白な雪の上に咲く茶色い花もまたいいものです。手にとって、じっくり観察できるのも冬ならではの楽しみです。

13 大きさはゴルフボールくらい。 まん丸になって冬眠するヤマネ。

ツキノワグマのほかにも裏磐梯には冬眠する動物がいます。ネズミのような風貌にふさふさの長いしっぽ、クリクリした可愛い目をもつヤマネもそのひとつ。夜行性のため、なかなか姿を見ることはできませんが、冬眠していない時期は森の中を忙しく動き回り、昆虫や木の実などを食べます。冬になると樹洞や落ち葉の下でボールのように丸まって眠り、じっと春を待ちます。

14 シカみたいだけど、ウシです。 穏やかな性格のニホンカモシカ。

冬の森でバツリ出くわすことがあるのが、ニホンカモシカ。一見シカに似ていますがウシ科で、ヤギやウシに近い動物です。国の特別天然記念物に指定され狩猟の対象にならないことから、人間を恐れず近づいてくることもあります。びっくりすると威嚇してくることもあるので、山で出会っても静かに道をゆずってあげましょう。ツノがなく小さいものは子どもです。

15 水に潜るのは好き、嫌い？ 水鳥の潜水能力をチェック。

裏磐梯の湖沼には多くの水鳥が暮らし、冬でも元気に活動しています。黒い頭に黄色い目が特徴的なキンクロハジロは潜水上手な名スイマー。水の中を自在に泳ぎ、魚などを捕まえます。かたやヒドリガモは潜水が苦手なようで、頭だけ水中に突っ込み、水草などをついばむ様子がよく見られます。逆立ちするようにお尻だけ水面に出している姿にクスッと笑ってしまいます。

15 狩りの名人は冬も健在。 ホンドギツネのダイブ戦法。

すばしこいネズミを捕まえて食べるホンドギツネの狩りは、冬にはいっそうダイナミックになります。雪の下を動き回るネズミは目には見えませんが、耳のいいキツネはその音をキャッチして雪面に頭からダイブ！ 失敗して顔に雪だらけになっても、何度もチャレンジします。狩りが難しくなる冬を乗り切るためには頭脳が命。人知れず繰り返される、雪の森の攻防戦です。